

きたたんば ひがしながれ
北丹波・東流遺跡

所在地	稲沢市下津丹下田町・下津森町・下津下町西一丁目 (北緯35度15分6秒 東経136度49分39秒)
調査理由	街路改良工事(都)名古屋岐阜線
調査期間	平成25年11月～平成26年2月
調査面積	1,000㎡
担当者	永井宏幸



調査地点(1/2.5万「一宮」)

調査の経過 県道名古屋岐阜線の街路改良工事業にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、昨年度に2,320㎡、今年度に1,000㎡おこなった。調査区は現道に沿って、街路改良部分を対象とした。南北に延びる県道に対して、東西方向を横断する公道などを境に、便宜上13A～13E区の都合5つの調査区に分けて調査を進めた。なお、今年度は県道の西側をおもに調査した。

立地と環境 遺跡は、遺跡の北東側にある青木川右岸に広がる自然堤防およびその後背湿地に立地する。標高は現況4～5m前後である。遺跡範囲と明治17年地籍図から当時の土地利用を照合してみると、この中央付近に北東から南西にかけて水田がある。そのほかは概ね畑地利用であった。つまり、遺跡は微高地上に展開し、その中央に低い部分が横断する景観が地籍図から読み取れる。調査の結果、低い部分に古代の自然河道が確認され、この部分は周辺に比べ地下水位が高く、調査中湧水に悩まされた。

調査の概要 調査の結果、昨年度に引き続き古墳時代前期、奈良時代初頭を中心とした古代前半期、鎌倉時代初頭を中心とした中世前半期、以上大きく3つの時期を中心に遺構が展開することが再確認された。

古墳時代の遺構は遺跡の北寄り溝を確認した。農水路と推定した昨年度の調査で検出した溝の規模は、幅1.0m、深さ0.6mのものが最も多かった。この規模を基準にすると、13A区001SDと13C区045SDは標準サイズの溝、13B区003SDはこれらに比べ1/2程度の溝を確認した。農水路とすれば、幹路と枝路になるかもしれない。遺物は13C区に古墳時代の甕などが少量出土した程度で、昨年度にくらべ少ない。時期は層序に準拠して古墳時代前期と考えた。なお、13B区溝003SD周辺の水田耕作土層以外に耕作地に関連する痕跡は認められなかった。

古代の遺構はほぼ全域に展開していた。13C・13D・13Ec区では竪穴建物を確認した。13C区竪穴建物043SIは、南北軸4.8m、深さ55cmを測り、壁際に壁溝がめぐる。北辺に焼土と炭化物が集中する箇所があり、カマドの可能性がある。13Ec区020SXは造り付けカマドをもつ竪穴建物で、遺物量も多く、カマドに小型の伊勢甕が倒立状態で出土した。いずれも8世紀初頭前後を中心とする時期である。

12世紀後半から13世紀前半を中心とした中世の遺構は、13C・13D・13Ebで確認した。そのなかでも13C区は、掘立柱建物が想定できるピット列などを検出した。この調査区は、他の調査区にくらべ後世の削平が少なかった。古代の遺構より30cmほど高い位置で中世の遺構を確認できた。昨年度、12F区などで確認した幅3m、深さ約1mの溝を13D区と13Eb区でも確認した。13D区溝002SDは敷地を区画する溝の南西隅に相当し、調査区内

で直角に屈曲する。13Eb区溝008SDは尾張型6型式碗皿類を中心に青磁の瓶類底部などがまとまって出土した。

ま と め 本年度の成果として特筆すべき点は、中世前半期の遺構群である。昨年度、井戸群を確認した12C区、大溝を確認した12F区は遺跡の北側で、一般的な屋敷地より規模の大きい区画を想定した。本年度は遺跡南側の溝の存在によって少なくとも2区画以上新たに確認したことになる。

これら区画の位置付けは今後の課題であるが、これまでに中世前半期を中心とする遺跡が周辺に存在しなかったことと、この時期に前後する下津北山遺跡と下津宿遺跡が中世国府・国衙に関連する遺跡として指摘されていることから、中世前半期の注目すべき遺跡となった。
(永井宏幸)

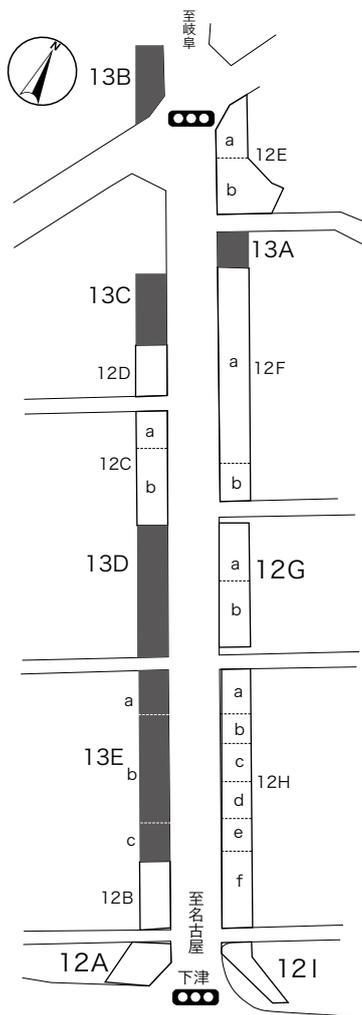
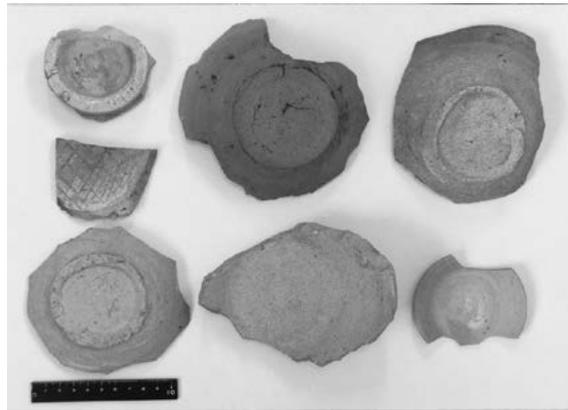


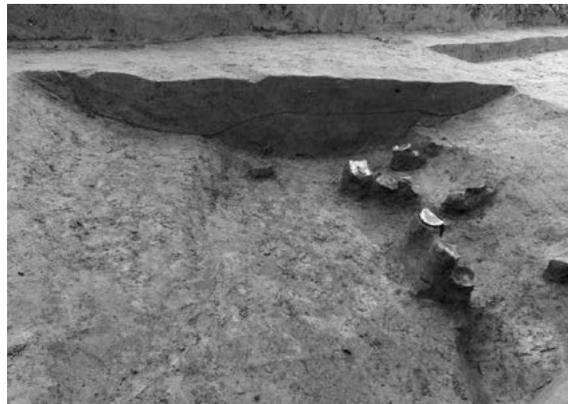
図1 調査区位置図(1:2,000)



13Eb区008SD出土遺物



13D区002SD



13Eb区008SD